

新渡戸博士と英文学

長尾輝彦

新渡戸稻造(1862-1933)は札幌農学校卒業後に1年間東京大学の選科生になるが、志願した時の面接官に、農業経済を学ぶほかに英文学もしたいと言ったところ、「英文学は何のために」と問われて、「太平洋の橋になるため」と答えた。英文学はあくまで副業で、本業は別にあった。しかし本業がいろいろ変わったのに対して、この副業は生涯変わらなかつたと、最晩年の講演で述べている。新渡戸博士の国際的な活躍の中で、英文学の知識がどのように役立っていたかを見てみた。

新渡戸は9歳の時に東京の太田家の養子となって上京、外国人の英語学校で学んだ後、東京英語学校に入学。教科書も英語、教師も外国人教師、特に米人教師スコットから、シェイクスピアをはじめ主要な英文学の作品を学び、これがその後生涯にわたって続く英文学愛読の素地となった。その後に入学した札幌農学校時代には、プルタークの英訳『英雄列伝』を愛読し、カーライルの著書と出会ったことなどもよく知られている。同期の内村鑑三は、後年の回想で、当時の新渡戸を「文学的だった」と評している。新渡戸が英文学と言うとき、純文学はもとより英語を通して入ってくるギリシャ・ローマの古典や西洋の歴史、思想などを含む広い意味の英文学であった。その成果が最もよく表れているのが37歳の時に書いた *Bushido* である。この著書は、武士道の名のもとで、日本人の倫理観を順を追って説明したのであるが、それと平行して、シェイクスピアをはじめとする英文学から引用したり、西洋の故事を引き合いに出したりして、西洋にも同じ倫理観があることを指摘する二段構えの議論を展開している。例えば、真の勇者について語る際に、謙信が信玄に塩を送ったという話を引き合いに出す。東海の北条氏が塩留めを行って信玄を困らせようとしたとき、謙信が信玄に塩を送り、我らは「塩ではなく刀で」戦うと言ったという話を紹介し、それに続いて、同じように、古代ローマで、ゴール人がアルプスを越えて攻めてきてローマを包囲したとき、元老院が大枚の金子を渡して引き取ってもらおうとしたところに、カミルスが新たに編成した部隊を率いてローマに帰還し、我らは「金ではなく鉄で」戦うと言ってゴール人を追い払ったというプルタークの記述を紹介する。また、王たる者の資質について、慈愛の心こそが、王冠や王笏に勝るものだということを、日本人は儒教の教え（孔子の徳治主義）によって知っていた。ただ、シェイクスピアのような雄弁がないだけだと言う。西洋の読者に、「シェイクスピアの雄弁？」そうか、法学士に変装したポーシャに言わせたあの台詞のことだと改めて思い出させる戦術である。さらに米沢藩で善政を敷いた上杉鷹山の遺訓「藩主は藩と民のために存在するのであって、その逆ではない」を紹介したあとで、時も同じ18世紀プロシアのフレデリック大王が、君主は国民の「しもべ」でなくてはならないと言ったことに言及する。これはカーライルの『フレデリック二世伝』からの引用であろう。

西洋の読者にとって、日本を知るだけでなく、自分自身の知識を再確認させられる、読み応えのある教養書でもあると思われたに違いない。セオドール・ルーズベルトも、感動し、30部追加注文して、友人たちに配ったと言われる。数年のうちにドイツ語、ポーランド語、フランス語、ノルウェー語、ハンガリー語、ロシア語、イタリア語に翻訳された。この本が出版されたときジュリアン・ホーソン（『緋文字』の作者の息子）が次のような書評を書いている。「この著者の英語は正確・明晰であり日本のような遠い国の人々が書いたとは思えない。しかしそれは些細なことで、驚くべきは、この著者がおよそ西洋の知識人が持っている知識の全てに精通しているらしいということ、そしてその上で西洋の知識人が知らない東洋についての知識にも通じているということだ」。まさに「太平洋の橋」にふさわしい著書だったと言える。

いろいろ変わったという新渡戸の本業の中で、最も特筆すべきは57歳から64歳までの連盟事務局時代の活躍である。連盟のPRを行うスポーツマンの役割を担い、また1922年に発足した国際知的協力委員会において、事務局を代表して十数人の著名な学者を束ねる幹事役をした。この委員会のメンバーが連盟本部での会合を終えた後に、新渡戸の住む邸宅レザマンドリエに集まり、レマン湖に接し遠くモンブランを眺める芝生の庭で談笑し、AINシュタインが得意のバイオリンの演奏を披露したというエピソードを、ILOの日本代表としてジュネーブに着任していた鮎沢巖が報告している。おそらくこれは新渡戸の人生が最も輝いた時だったと言える。そのような中でも英文学の愛読は切れ目なく続いている。後年の回想で、H.G.ウェルズの講演会に出席した時のことと語っている。ジュネーブからロンドンに出張した折に、バーミンガムでウェルズの講演会があるので、出かけていって出席した。講演が終わった後、誰からも質問がないので、司会者が新渡戸に発言を求めたという。そこで新渡戸が立って答えた。「私はかねてよりウェルズ氏のことを世界の東西南北全てに向けて窓を開いている人として尊敬していました。氏の *Modern Utopia* を読むとサムライということばが何度も出てきます。Research Magnificent ではブシドーということばが散見します。また氏の近著 *God the*

Invisible King を読むとそこに書かれている概念が、日本の神道の神の概念に通じるものがあります。氏はどのようにしてこういった知識を得られたのでしょうか。いずれにしても氏の博識は敬服に値します」。ウェルズは、講演の始まる前に新渡戸からもらっていた名刺を改めて見てみて、講演が終わるとすぐに新渡戸のところに歩み寄り、是非またお会いしてゆっくり話しましょうと言ったという。ウェルズはそれまでに長編だけでも30近く作品を世に出していたが、その中からその3冊をピックアップするには、また「東西南北すべてに云々」ということを言えるためには、全部読んでいたと想定せざるを得ないのではないか。国際的に有名な *Bushido* の著者だと気づいたということもあるだろうが、その有名人が自分の作品を全て読んでくれているらしいことに感動して駆け寄ったとも思える。

さらに 1933 年、新渡戸の生涯最後の年の 4 月 7 日、帝国ホテルで開かれた東京汎太平洋俱楽部の午餐会で、内外 100 人を超える聴衆に向けて行った講演、悪化し始めた日米関係を危惧しつつも、なお個人レベルの努力と友情に一縷の望みをかけて語ったその講演を、「私たちは暗い夜の海で行き交う船のように出会いました。しかし夜の海で出会った船は忘れるがたいものではないでしょうか。皆様とのこの出会い、友情の輪を大切にしたいと思います」と、ロングフェローの詩の一節を踏まえて印象的に締めくくっている。これは、その年の 8 月末にカナダ・バンフで開かれた太平洋問題調査会の大会を無事終えた後、病に倒れ、カナダ・ヴィクトリア市の病院で 71 年の生涯を終えた新渡戸が、日米友好を希求する人たちに残した最後のメッセージだったと言える。

このメッセージを受け、その遺志を継ぎ、日米友好に貢献した 2 人のアメリカ人の後日談を、最後に紹介した。

1 人はパサディナで不動産業を営むウィリアム・カーという人物。彼は新渡戸の誘いで訪日し、この講演のころ東京に滞在していた。新渡戸の死から 8 年後 1941 年、真珠湾攻撃が起こり、日米開戦となる。開戦と一緒に西海岸の日系人は、大統領令によって、内陸部 10 カ所に設けられた収容所に移送された。彼らは手に持てる荷物だけ持って、住み慣れた家を退去させられた。これが始まると、カーはすぐさま活発な言論活動を開始した。これは合衆国憲法の権利章典に反するものだということを新聞に投稿したり、政府に抗議文を送ったりした。また不動産業者の立場で、退去させられた人たちの家屋を差し押さえ、他人の手に渡らないようにした。さらに何人かの協力者とともに Friends of American Way 「アメリカの民主主義を守る友の会」を立ち上げ、160 人の会員を得て、収容所の日系人を援助する活動を展開した。そして、戦争が終わって日系人が解放されると、それでもなお根強かった排斥運動 "Ban the Jap" を叫ぶ圧力団体に迫害されながら、日系人がもとの場所に住めるように、また彼らの子弟がもとの大学や学校に復学できるように尽力した。こういったことから、日系人の間では彼に対する感謝の気持ちは、世代を超えていつまでも消えることがなかった。これから 30 年以上もあと、彼の死後に、カーに、人道主義者に贈られる賞が授与されたが、その授賞式の日には、カー氏の受賞を祝うために、日系人が大挙して集まり、彼らのトラックがパサディナ市庁舎に通じる道という道をふさいでしまうほどだったという。

もう 1 人はハーバート・ニコルソンという人物。彼は日本で長くクエーカーの宣教師としていろんな慈善活動をしていたが、新渡戸夫妻もクエーカー教徒だったので、各地で活動しているクエーカーの宣教師が時々新渡戸邸に集まって情報交換をしていた。その常連客の 1 人がこのニコルソンだった。新渡戸とは親しい仲であり、当然、1 年間に及ぶアメリカ講演旅行から帰国した新渡戸に会うためにもこの講演を聴きに来ていたと推察できる。その後、日米関係が悪化すると、アメリカ人というだけで疑いの目で見られるようになり、活動がしにくくなつたため、やむなく帰国し、夫人の出身地でもあったカーナビージュに移り住んでいた。そしてそこのメソディスト教会の牧師が病気のため、代理牧師をしていたが、日系人の強制収容が始まると、その教会堂を倉庫代わりにして、収容された人たちが残していく貴重品をどんどん運び込んで保管し、また緊急必要なものは手を尽くして収容所に届けた。そしてカーが立ち上げた Friends of American Way の協力者のひとりとなって活動をともにした。そして終戦後、日本の食料難のことを知ると、子供たちの栄養状態を心配し、山羊のミルクがよいのではないかということで、日本に山羊を送る運動の先頭に立った。彼らが日本に届けた山羊の総数は 5 千頭に及んだと言われる。さらに 1948 年には、日本の子供たちに手ずから救援物資と山羊のミルクを届けるために来日し、「やぎのおじさん」の愛称で親しまれ、当時の小学校 5 年の国語の教科書にも載った。

新渡戸は先の講演で、個人レベルの友情と努力に望みをつなぎ、それがいつかはひと筋の光をもたらしてくれる信じて聴衆に語りかけたのであるが、カーやニコルソン等の活動は、その光を 2 筋も 3 筋ももたらしたと言えるのではないか。新渡戸が若いころから抱いていた「太平洋の橋になりたい」という希望は、このような形でも成就していたと言える。